

園行事における気になる子どもへの支援

—支援の実施の程度に基づくクラスター分類—

小林 真¹ 中嶋 りか子²

Support for Young Children with Special Needs at Preschool Events: Cluster Classification Based on the Degree of Support Provided

KOBAYASHI Makoto NAKAJIMA Rikako

Email:kobamako@edu.u-toyama.ac.jp

Abstract

In this study, a questionnaire was administered to teachers at an early childhood education facility. We asked what kind of support they provide to children of concern (children with developmental disability-like tendencies) during preschool events. A cluster analysis using Ward's method resulted in three clusters of support. First, support in the form of caregivers accompanying the child; second, type was mainly motivational support, such as reducing the workload of activities for young children and incorporating their favorite activities to encourage them to engage in activities willingly; and third support was a combination of giving perspective to the activity and consideration for sensory oversensitivity in one cluster. The second was support that could be considered a reasonable accommodation, such as reducing the workload of the activities in which the child participates or selecting activities that are easier for the child to participate in. The third was support with a good understanding of ASD tendencies.

キーワード：気になる（支援の必要な）子ども、園行事、クラスター分析

Keywords : children with special needs, preschool events, cluster analysis

I 問題と目的

1. 幼児教育施設に在籍する気になる子ども

幼児教育施設（本研究では、幼稚園・幼保連携型認定こども園・保育所を総称する場合には、幼児教育施設と表記する）において「気になる子ども（気になる子）」の存在が指摘されて久しい。本郷・澤江・鈴木・小泉・飯島（2003）は、気になる子どもの特徴を「障害があると認定されていないが保育者にとって保育が難しいと感じる子ども」と述べている。藤井・小林（2010）も、保育者を対象とした調査結果から、気になる子どもに発達障害児と共通した特徴が見られることを指摘している。したがって、障害の存在ははっきりとしていないが、知的障害や発達障害に似た認知・行動の特徴を有し、保育者が

何らかの困難感を有する子どもが気になる子どもであると考えられる。

後藤・村田・大森（2010）が名古屋市の公立保育所を対象に実施した調査によれば、2006年の時点で統合保育の対象になっていた障害児は4.2%、診断のない気になる子は8.2%であった。これに対して河野（2010）がある地方都市で行った調査では、2008年の時点で幼児教育施設に在籍していた障害児は1.7%、気になる子どもは2.3%であった。後藤ら（2010）が公立保育所を対象に調査を行っていたのに対して河野（2010）は公立・私立の幼稚園・保育所・児童園（現・認定こども園）を対象に調査を行っていた。保育所においては1974年より障害児保育を積極的に行っており（厚生省, 1974）、加配保育士を任用する制度が幼稚園よりも整備されていることから、障害児や気になる子どもを受け入れる可能性が高い。しかし、このことを考慮に入れても、後藤ら（2010）と河野（2010）の報告にはかなりの開き

¹ 富山大学教育学系

² 富山市立太田保育所

がある。

この当時、文部科学省（2002）の調査による小・中学校の通常の学級に在籍する発達障害児や発達障害が疑われる児童生徒の在籍率は6.3%と報告されていた。したがって、河野（2010）の調査報告は文部科学省（2002）の報告よりも割合が少なく、保育者による「気になる子ども」の認識にはかなりばらつきがあったと考えられる。

しかし2018年に行われた調査（京林, 2019）によれば、保育者が感じる気になる子どもの割合は36.7%であった。2019年に行われた調査（落合, 2021）の報告では、39.1%に上っている。文部科学省（2022）が発表した小・中学校の通常の学級に在籍する発達障害児や発達障害が疑われる児童生徒の割合は8.8%に増加しているが、これに比べても現在の保育現場における気になる子どもの割合は非常に高くなっているといえる。

保育者が「気になる子ども」と判断した幼児の実際の姿が全ての調査で一致しているとは限らないが、少なくとも保育現場では気になる子どもの割合がかなり増加しており、保育者が様々な困難感を感じていると考えられる。

緒方（2020）は「気になる子ども」への介入技法に関する様々な文献を解題し、応用行動分析に基づいた介入・援助が多く報告されていることを紹介している。応用行動分析とはオペラント条件の理論を人間の行動の変容に用いる考え方であり、結果事象の操作（強化子の使用）が大きな特徴である。実際に仁科・遠藤（2018）は、トークンエコノミー法を用いて不適切な行動の改善に成功している。

しかし応用行動分析の特徴は、結果事象の操作だけでなく、行動の先行事象（環境）や背景要因に対する調整や変更を行う点にもある。環境を調整することで、幼児が安心して日々の生活を送ることができ、適切な行動が実行できるように成長していく。したがって、幼児教育施設において気になる子どもが生活する環境を調整・変更することは大切な保育活動である。

2. 幼児教育施設における園行事の意義

幼稚園、幼保連携型認定こども園、保育所（以下、幼児教育施設と総称する）における幼児教育の活動の中に、各施設が企画する様々な行事（以下、園行事と総称する）がある。幼児は園行事を通じて様々

な体験をし、主体的に課題に取り組む態度を身につけていく。

例えば齋藤（2019）は、幼児が慣れ親しんだ「ぐりとぐら」の絵本を題材に、運動会の内容を主体的に作り上げていく実践を紹介している。従来のように一斉に行われる競技大会ではなく、絵本のストーリーに沿って様々な運動・表現活動が行われる運動会では、どのような活動を取り入れるかを幼児が話し合い、大道具や小道具も自分たちで作るものであった。

また小林・岩田・岩田・米崎（2017）は、生活発表会における主体的な劇作りを通じて、幼児が仲間と伝え合ったり協力し合ったりしながら、領域「人間関係」に関する様々な体験を積むことができたことを報告している。生活発表会は、領域「言葉」・「表現」（音楽・造形・身体表現）の機会と捉えられがちだが、自分たちで劇を作り上げる過程で、領域「人間関係」の学習体験にもなっていた。

運動会や生活発表会は日本のほとんどの幼児教育施設で行われる園行事である。したがって幼児教育施設に在籍する気になる子どもたちに貴重な学習機会を提供するためには、園行事において適切な配慮や支援を行う必要がある。しかし、園行事やその練習過程において、どのような配慮や支援が行われているのかについては、いくつかの事例研究が報告されているだけで量的な調査はほとんど行われていない。

3. 本研究の目的

これまでの議論を踏まえ、本研究では幼児教育施設の園行事において気になる子どもに対してどのような支援が行われているのかを量的に調査する。調査の内容は、園行事や練習への参加に対して、幼児が参加しやすいような環境の変更・調整がどのように行われているかに関するものである。そして行われる確率が高い支援とそうでない支援を明らかにすることによって、今後の園行事に向けた配慮・支援のあり方を提言することを目的としている。

Ⅱ 方法

対象者 富山県内の保育者 150 名。

手続き 質問紙調査を実施した。保育者を対象とした研修会の参加者に対して研修会の前に調査用紙を

配付し、研修会終了後に回収した。研修に支障を来さないように、昼休み中に回答するように依頼した。

調査内容 予備調査に基づいて2名の著者で調査項目を作成した。公立・私立幼稚園および認定こども園の管理職・管理職経験者、中堅教諭計5名に対して半構造化面接を行い、テキストデータを質的に整理して質問項目を作成した。

本研究における調査の概略は以下の通りである。まず全体の設問として、特定の子どもではなく、今までに出会った何人かの気になる子どもたちを思い浮かべてください。気になる子どもどもが行事に参加できるように、あなたが現在勤務している園（所）でどのような支援を行っている（行った）かをお答え下さい。』という文を記載した。そして次の①～⑥の計30項目については、全くしない（1点）、あまりしない（2点）、よくする（3点）、必ずする（4点）の4段階で回答を求めた。

①運動会における支援 3項目

②生活発表会における支援 4項目

③行事全般における支援 13項目

（Appendixを参照）

④行事に向けた園全体での取り組み 3項目

⑤日常の保育の中での配慮 3項目

⑥（気になる子どもの）保護者との関わり 4項目

さらに対象者の属性として、現在の勤務先、担当年齢（または個別配慮児担当、等）、現在の職場での勤務年数、保育者としての通算の勤務年数の記入を求めた。

調査時期 2021年7月～10月に実施した。

倫理的配慮 調査の実施について、まず研修の主催者の了解を得た。調査の依頼文に、富山大学研究者倫理・行動規範に則って以下の事項を記載すると共に、口頭でも説明した。

①調査は無記名で行い、個人を特定することはありません。

②調査へのご協力は自由です。調査に協力しないことで、皆様に不利益が生じることは一切ありません。

③途中で調査への協力をおやめになることもできます。

④皆様のご回答は研究のためだけに使用いたします。論文等で調査結果を発表する際には、個人が特定されないよう、十分な配慮をいたします。

⑤データは、電子化した状態で小林が所定の期間保管いたします。

以上の点についてご了承いただける場合には、次ページ以降のアンケートにお答えください。

調査責任者 富山大学人間発達科学部教授
小林 真

問い合わせ先 e-mail kobamako@edu.u-toyama.ac.jp

対象者の回答が他者の目に触れないように、調査用紙とシール付きの封筒を一緒に配付し、封筒に入れて封をしてから提出するように依頼した。したがって、回収された調査用紙については倫理的問題はないと判断できる。

利益相反事項 利益相反事項はない。

Ⅲ 結果

1. 対象者の属性

現在の勤務先 幼保連携型認定こども園 104名、幼稚園 2名、保育所（園）39名、その他 2名、無記入 3名であった。

立場 年齢担当あり 125名、個別配慮児担当 3名、担当なし 11名、無記入 11名であった。

担当年齢 125名の内訳は、0歳児 19名、1歳児 26名、2歳児 23名、3歳児 20名、4歳児 17名、5歳児 13名、異年齢混合クラス 6名、無記入 1名であった。

現在の勤務年数 現在の職場における勤務年数の範囲は0年（勤務初年度）～25年、平均7.4年、標準偏差5.6年であった。

通算の勤務年数 範囲は2年～38年、平均12.6年、標準偏差7.4年であった。

2. 園行事における支援の実態

幼児教育施設における園行事は多様であるため、本研究では調査項目③の「行事全般に対する支援」に関する13項目への回答を取り上げて分析する。

なお、対象者の属性の項目で担当年齢なしと回答した者のうち、自由記述欄に保育行政の担当と病棟保育の担当という記載があった者は、幼児教育施設における保育者ではないため、以下の分析からは除外した。

「行事全般に対する支援」13項目に対して、実施されている程度（4段階評定）のパターンが似ている項目を類型化するため、クラスター分析を実施した。距離行列として平方ユークリッド距離を用い、Ward法によるクラスター結合を行った。ク

ラスター分析によって得られたデンドログラムをFigure 1に示す。また、Figure 1に示されたクラスターの項目の順序に対応させて、各項目の回答者の数をFigure 2に示した。

Figure 1からわかるように、質問13・14・15の

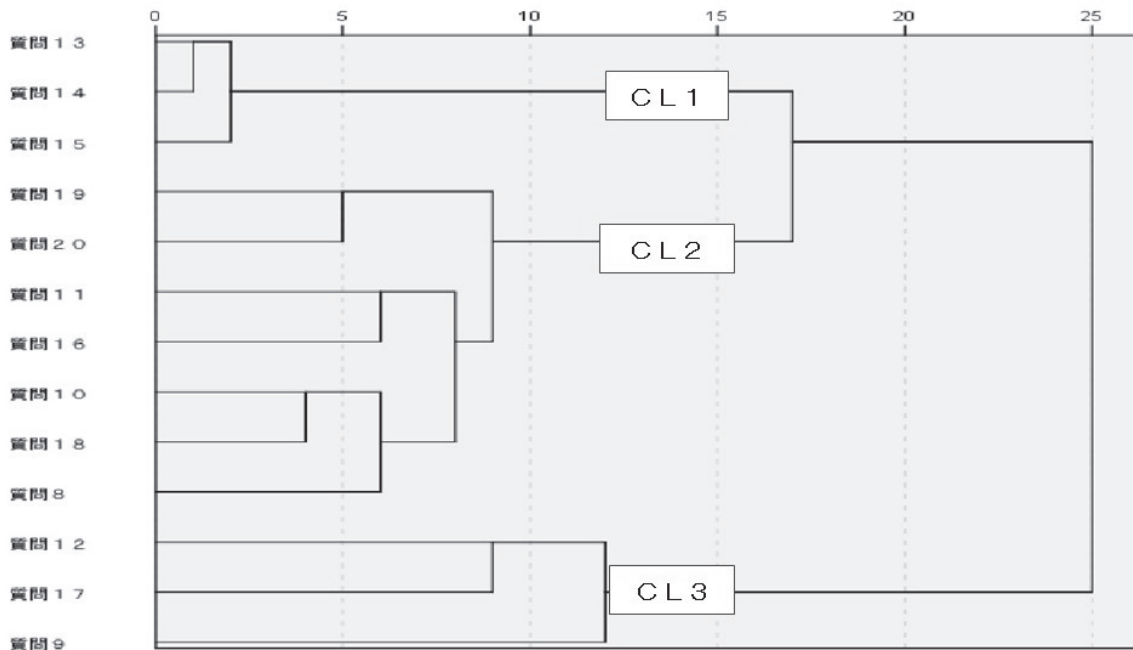


Figure 1 援助のデンドログラム (Ward法・平方ユークリッド距離)

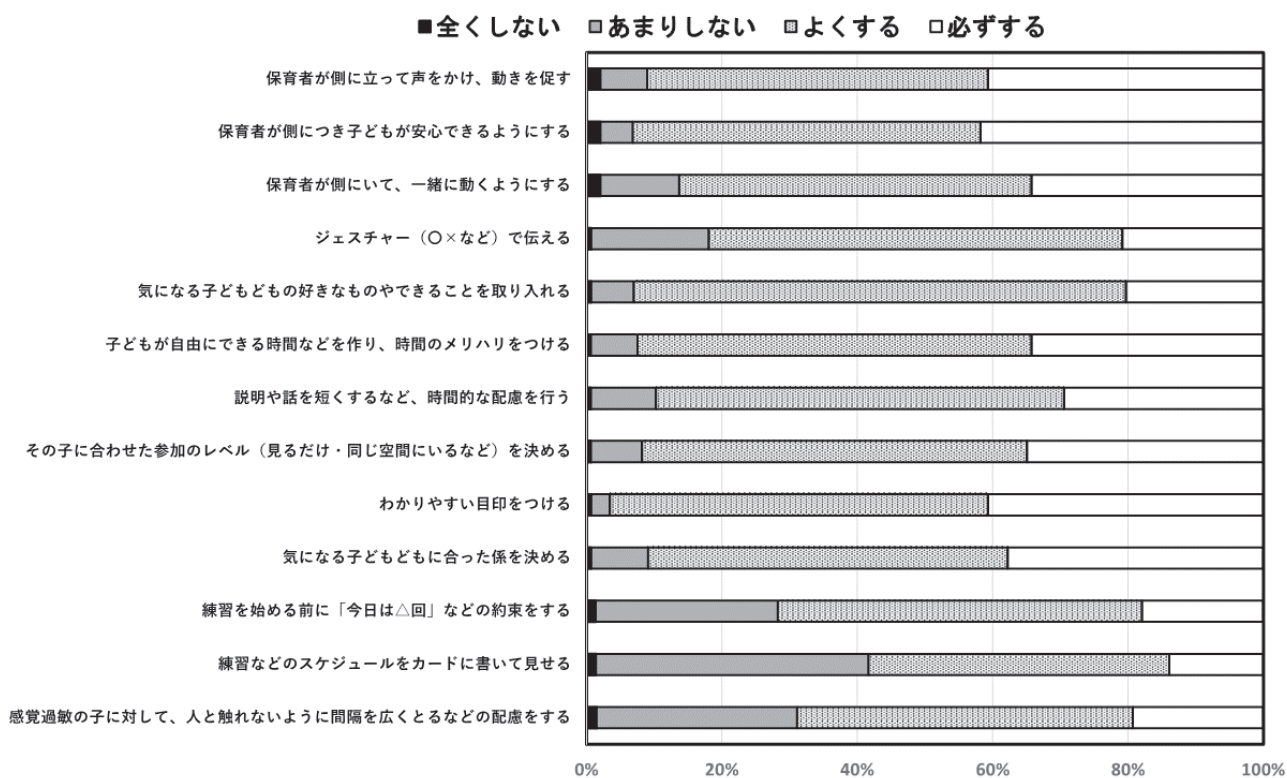


Figure 2 援助の実態

3項目が近い関係にあったので、これをクラスター1 (CL1) と命名した。次に質問19・20、質問11・16、質問8・10・18がそれぞれ小さいクラスターを形成し、それが統合されているのでこれをクラスター2 (CL2) と命名した。これらの項目とは離れた状態で、質問9・12・17が結合したので、これをクラスター3 (CL3) と命名した。

CL1の項目はすべて保育者が子どものそばに付き添う支援であり、これらの支援はFigure 2からわかるように「よくする」・「必ずする」という回答が合わせて80%を超えていた。

CL2の項目はFigure 2に見られるように大きく3つの下位クラスターに分けることができる。質問19・20はジェスチャーや○×などの視覚的な支援と、気になる子どもが好きなこと・できることを取り入れるという支援である。次に質問11・16は、自由にできる時間を作ったり、説明を短くしたりするなど、子どもが集中できる時間を考慮した支援と考えられる。

さらに質問8・10・18が下位クラスターとしてまとまっており、本人に合わせた係を設定する、わかりやすく目印をつける、その子どもに合わせた参加のレベルを設定するという支援であった。CL2として大きくまとまった支援は、子どもの個性に合わせた参加のしかたの工夫、視覚的な手がかりの使用などであった。

CL3の項目は、活動の予告のしかたに関する2項目と、感覚の過敏さに対応してスペースを確保するという内容であった。Figure 2からわかるように、CL3の項目はCL1・CL2に比べると「あまりしない」という回答の割合が多く、「必ずする」という回答が少ない点になっている。保育者としては、これらの支援を実施しにくいと感じていることが示された。

IV 考察

今回の調査から、園行事のために保育者が行う気になる子どもへの支援は、その実施状況から大きく3種類に分けられることが示された。1つ目のタイプ (CL1) は、保育者が対象児のそばに付き添う支援であった。保育者がそばにいることによって、幼児にとって安心感を与えることが可能である。また、気になる子どもに関する専門的な知識がなくても、実施することが容易である。しかし、常に保育者の

指示に従って行動することは、幼児が自ら状況を判断して活動することを妨げてしまう可能性が高い。いつ・どこで・何をするのか・どのような状態になったら終結するのか、といった行事の進行状況を幼児自身が判断して参加する力を育てるためには、CL3に示すような見通しを持つための工夫が必要である。

2番目のタイプは、幼児に対する活動の負荷を減らしたり、進んで活動に取り組めるように本人の好きな活動を取り入れたりする等の主に動機づけを高めるための支援であった。このタイプの支援は、気になる子どもが集団での活動に参加するために大切な配慮である。障害者差別解消法に規定されているように「合理的配慮」とは、障害者が他の者との平等を基礎として全ての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整である。したがって、行事に参加できるように負荷を減らす調整を行ったり、子どもが参加しやすいような活動を取り入れる等の変更を行ったりすることは、合理的配慮の提供と考えることができる。

冒頭に述べたように、本研究でいう「気になる子ども」は、障害の診断は受けていないが発達障害児に似た特徴を示す子どもである。障害児とみなすことはできないかもしれないが、その疑いがある子どもに対して合理的配慮を行うことは、むしろ本人のやる気を高めたり周囲から認められたりする機会を増やすことにつながる。したがってCL2に分類されたような支援はむしろ望ましいものと考えられる。

3つ目のタイプは、活動の予告（見通しを持つ）ための支援と、感覚の過敏さに対する支援からなっている。これらの支援が1つのクラスターにまとまった理由を考察する。本研究ではクラスターを分類する際に、支援を実施している頻度（全くしない～必ずする）を類似度に用いた。したがって、活動の予告をしている幼児教育施設は、感覚の過敏さにも配慮をしている傾向が高いといえる。すなわち、発達障害（特に自閉スペクトラム症）の子どもの特徴を理解し、的確な対応をしている施設では、これら3つの支援をいずれも「必ずする・よくする」傾向にあり、理解していない施設では「あまりしない・全くしない」傾向にある。発達障害児や気になる子どもに対する理解の程度の違いが、3つの支援

を CL3 に結合させた理由であると考えられる。

今後、それぞれの幼児教育施設において発達障害児や気になる子どもへの理解が深まり、支援の技術が定着するようになれば、CL2 と CL3 が 1 つのクラスターにまとまってくる可能性もある。数年後に本研究と同様の内容の調査を行うことによって、幼児教育施設における保育の質的变化を見出すことができるかもしれない。

引用文献

- 藤井千愛・小林真 2010 保育者による「気になる子ども」の評価 - 「気になる子ども」と発達障害との関連性 - とやま発達福祉学年報, **1**, 41-48.
- 後藤秀爾・村田佳菜子・大森麻美 2020 統合保育における「気になる子」をめぐる実態調査 - 名古屋市保育所の 2006 年と 2008 年の比較データより - 愛知淑徳大学論集, コミュニケーション学部・心理学研究科篇, **10**, 1-16.
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子 2003 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究 発達障害研究, **25**, 50-61.
- 小林真・岩田夏実・岩田郁代・米崎瑛美 2017 保育内容(人間関係)の観点から見た劇遊びの意義 - 富山大学人間発達科学部附属幼稚園における子どもまつりの教育的効果の検討 - 教育実践研究, **12**, 171-179.
- 河野順子 2010 幼稚園・保育園に在籍する特別な支援を必要とする子どもたちの現状と支援に関する調査研究 - 個別教育支援計画実施の観点から - 東海学園大学研究紀要, **15**, 83-97.
- 厚生省 1974 障害児保育事業実施要項 (<https://library.sapro-otani.ac.jp> を参照した。閲覧日: 2023.11.21)
- 京林由希子 2019 「気になる子」の行動特性に関する保育者の認識 - SDQ を用いた検討 - 岡山県立大学保健福祉学部紀要, **26** (1), 97-103.
- 文部科学省 2002 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査
- 文部科学省 2022 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果(令和4年)について https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2022/1421569_00005.htm

(2023.11.20 閲覧)

- 仁科綾菜・遠藤清香 2018 保育現場における気になる子への支援 - トークンエコノミー法を活用した不適応行動の改善 - 山梨学院大学研究紀要, **38**, 101-111.
- 落合利佳 2021 「気になる子」に対する保育者の意識と支援の実態 - 保育所アンケートからクラス編成に着目して - 京都女子大学発達教育学部紀要, **17**, 1-11.
- 緒方宣挙 2020 日本の保育現場における「気になる子ども」への介入技法に関する研究の動向 大阪総合保育大学紀要, **15**, 51-66.
- 齋藤善郎 2019 子どもの主体的活動から生まれる幼稚園の運動会 - 絵本「ぐりとぐら」をテーマに - 椋山女学園大学教育学部紀要, **12**, 101-112.

付記

1. 本研究は、第2著者(中嶋)が富山大学人間発達科学部に提出した特別研究論文と同一のデータを用いているが、論文そのものは第1著者(小林)の責任で新たに執筆したものである。質問紙の作成とデータの収集・入力に際しては第2著者と協力して研究を進めたので、共著論文として発表した。
2. Abstract の執筆にあたっては、翻訳サイト DeepL を補助的に使用した。

Appendix 本研究で使用した質問項目一覧

8. 気になる子どもどもに合った係を決める
9. 感覚過敏の子に対して、人と触れないように間隔を広くとるなどの配慮をする
10. その子に合わせた参加のレベル(見るだけ・同じ空間にいるなど)を決める
11. 子どもが自由にできる時間などを作り、時間のメリハリをつける
12. 練習を始める前に「今日は△回」などの約束をする
13. 保育者が側に立って声をかけ、動きを促す
14. 保育者が側につき子どもが安心できるようにする
15. 保育者が側にいて、一緒に動くようにする
16. 説明や話を短くするなど、時間的な配慮を行う
17. 練習などのスケジュールをカードに書いて見せ

る

18. わかりやすい目印をつける
19. ジェスチャー（○×など）で伝える
20. 気になる子どもどもの好きなものやできることを取り入れる

受付年月日（2023/10/20）

受理年月日（2023/12/22）